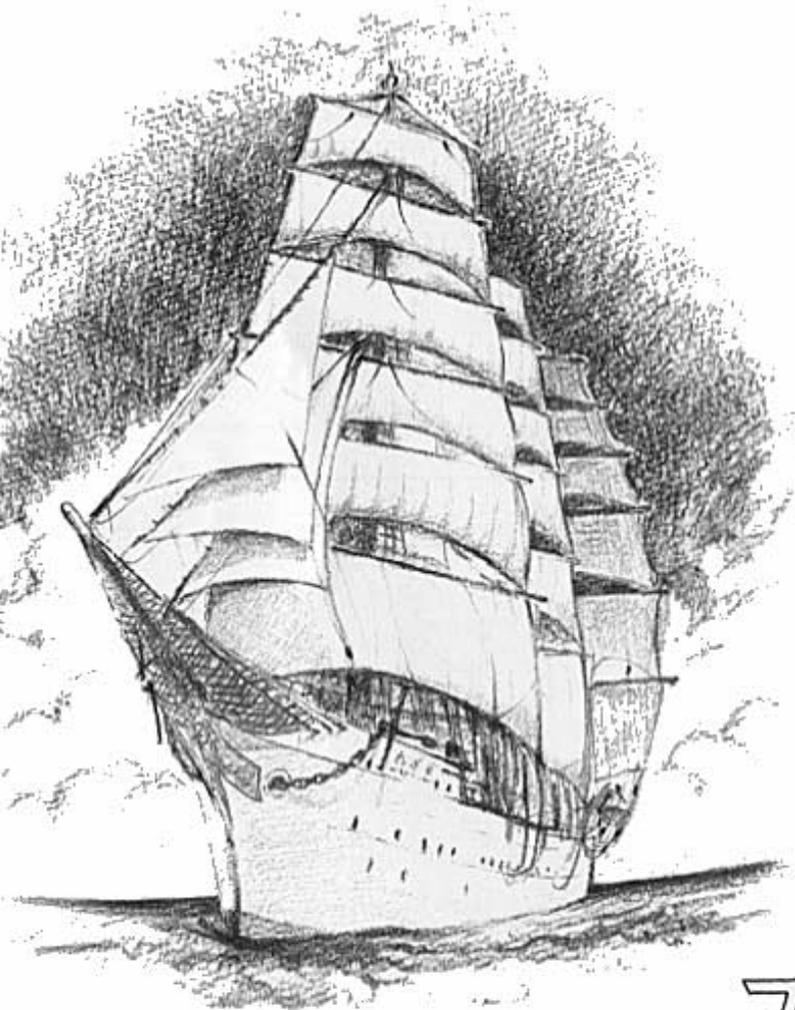


平成28年7月5日発行(毎月5日1回発行)
第54巻7月号(通巻684号)

風土



7

櫛 若 葉
南 う み を

湯 気 墳 い て 吉 野 の 茶 粥 山 ざ く ら

西 行 の 山 を 発 ち た る 花 吹 雪

花 び ら を 乗 せ て や 亀 の 甲 羅 干 し

藤本安騎生翁を想ふ

庵 の 辺 の 葉 わ さ び 摘 ん で 和 え 呉 れ し

畑 人 へ 吉 野 の 桜 ま た ふ ぶ く

畝作る鋤にてしばし野蒜掘る
雑草として虎杖を袈裟斬りに

丹波・大原神社の春祭 四句

またひとつ田の光りだす大原志

露の葉の吹かるる大原詣かな

春志の祝詞流るるみどりかな

餅屋来て露売のきて大原志

『風土』継承

櫂若葉もつとも高き風を生み



「風土」 主宰継承にあたり

南つみを

今年三月に神蔵器先生より、「山河集と風土集の選を頼む」とのお声がありました。

伝統のある「風土」を担うだけの力量が、浅学非才の私にあるだろうか躊躇しましたが、石川桂郎師から神蔵器先生へと引き継がれた「風土の詩精神」の灯を消してはならないと意を決しました。

今あらためて桂郎師の「手前の面ラのある俳句を作れ」と器先生の「命ふたつ」のことばを噛みしめています。桂郎師のことばを、私は単なる個性ということではなく、「身の丈に沿い肉体を通したことばで俳句を作れ」と受け止めています。

また器先生のことばを、私は「対象のいのちと私のいのちの交感が俳句の核である」と受け止めています。

人間を含め自然のあらゆるいのちとの交感を通して、借り物でない自分のことばを掴み、俳句として表現することが「風土の詩精神」に繋がると考えています。

これから私はこの視座で、みなさんの俳句と対峙し、佳き作品を選んでいきたいと思っていますので、よろしくお願います。

竹間集

同人作品



煩惱痛

根岸善行

雨も降る鳥啼も降る仏生会
揚雲雀息継ぎをするところまで
コーヒーのミルク渦巻く春の星
憤ること多けれど春惜しむ
腸に煩惱痛む竹の秋
春愁や波音のこの優しさに
春眠を小さな雨の通りけり

花馬酔木

林いづみ

花冷えの鷗外太宰の墓に供花
花十日どの日も花に寄り添へり
浅間嶺を遠見に春を惜しみをり
田水張る牛舎豚舎の屋根低く
蛙鳴く一番寺に近き宿
追伸のやうに雨降る花馬酔木
春愁のまぶたの上の眉を引く

花祭り

小林共代

釈迦牟尼の指を真似る子花祭り
奥宮に蝶のつき来る男坂
太郎より次郎が強気葱坊主
猩猩袴水音そだつ平家村
八鶴湖のぞむ寺領の桜東風
牡丹や梯子下りくる寺男
教卓のささくれに触れ啄木忌

葉 桜

中根美保

翳りくる方へ集まり花筏
春愁や油絵の具を盛り上げて
暮の春チエロを地に立て辻楽師
句碑青柳寺濺ぐ水の冷たき清和かな
蟻のみち武蔵相模を一跨ぎ
葉桜や背の丈ほどのすべり台
迷ひつつ来て緑蔭をひとり占め

人の輪

間島あきら

バス停に新時刻表黄水仙
小流れにいのち犇めく四月かな
人と人結ぶも人や初ざくら
飛花落花奥より出づる弓の丈
やや緩む今日の青空しやぼん玉
句誌つなぐ人の輪いくつ花馬酔木
両手足浸す汽水湖春惜しむ

春 愁

宮川みね子

春愁やひとつ残りし銀の匙
雁かへる水面まぶしくなりにけり
かげろふや和紙人形に目鼻なく
メ切のぎりぎり投函かげろへり
まろき膝並べてのぞく蝌蚪生まる
川底に日の斑の躍る蝌蚪動く
男坂のぼるリハビリ花吹雪

告天子

浜 福恵

緞帳上ぐ姫豆桜山桜
うぐひすの正調渡る鬼の里
花吹雪く昼を灯して観世音
若草や前方後円墳の丘
墳丘の空のふかみへ告天子
周濠の古きを訪ね屋蛙
石灯笼に大工兵六の銘蝶がゆく

老人ホーム入所三年

野沢しの武

飾り一つ無きもまた佳し老個室
何はともあれ紛れなき初鴉
松過ぎて老いには老いの一ト日あり
父の嵌めし記憶吾になし皮手袋
胡桃・胡麻・黄粉・餡餅老いどちに
留守の家に庭師入りをり松手入
朝より雪シャツのボタンを懸けちがひ
雪小止みバイク点して夕刊来る

月かかる夕べ済みたる雪吊に
柚子湯とふ俗信もまた捨てがたし
冬の海猫風に戻され逆らひ飛ぶ
短日や消しゴム付きの鉛筆執り
少な目の七草粥を余さず食ぶ
寒未明大腸癌検診下剤2ℓ嚥下辛し
空に白鳥地に千年の古木立つ
消灯と決めて擧みたる水つ洩
節分や空々菓子箱に鬼の面
裸木や稿二行ほど削らねば
昨夜の雪降り継ぐ雪や立春以後
落味噲や亡妻を憶へど口に出さず

山河集

同人作品



南うみを選

ぶつかりて離れて跳んであめんぼう

中嶋 陽子

加速するターザンロープ夏つばめ
万緑や水音近き美術館

酔で磨くグラス一列夜の青葉
今年竹希望の色の空に伸ぶ

筍のステーキ厚きこと一寸

杉本薬士子

初燕只今古民家改装中
いざ行かん白寿の時の花見まで

著莪咲いて虎屋の暖簾四百年
表具屋の店の掛け軸金太郎

散り急ぐけふの桜の白さかな

雨宮 桂子

思ひ出は殖ゆることなし花吹雪
無口なる熊谷草が風の中

継ぎ足しの花びらこぼれ春障子
さへづりの中に眠りて子の寝息

田中富有能

桜樹の瘤や花芽を育てをり
滑り台の児等の頭上に花吹雪

早蕨や山中へ入る京街道
神杉の梢の空や百千鳥

たんぽぽの絮が宇宙へ旅立つ日
ふくらみて堰越す水や初燕

生田 作

一本の櫂まるごと囀れり
秒針の音きはやかに花の昼

川筋に風のひろがる霜くすべ
半農の足を投げ出す花筵

山笑ふこゑともゲート開きけり
春の夢けいじ器師桂郎師
森屋慶基

尾根越えて襲ひ来るや雪解靄
風鐸のごと俯きぬ土佐水木
花りんご父の笑顔を見てをりぬ

春往ける水の昂まり枝川も
上迂蒼人

薪能鼓は薄き闇に打つ
能面を闇に外して薪能
単調な太鼓の調べ花会式
飛火野の三千坪の草青む

浮見堂の軒をゆらせり水陽炎
奥田茶々

耕しの真中秋篠寺へ抜け
堂々と立つ花嫁や花吹雪
リハビりに耳鼻科医も来る暮春かな
おにぎりにちりめん山椒ひこばゆる

桜餅吉野まぶしき空となり
岡 尚

風渡る近江の湖の春霞
菜の花や校舎は道の駅となり
灯台の見ゆる校庭卒業す

囀りや船大工打つ鑿の音

薫風やかはりばんこに羊撫で
池田光子
白山の水をたたへて田植ゑかな
朝掘りの筥を売る蓮如道
竹生島春の霞に浮いてをり
築つばに落ちて稚鮎の光りあふ

耕して天に至りぬ瀬戸の島
遠藤道遙子

園児等の稚魚の放流風光る
辛夷咲き山の水音高まりぬ
鳥けもの数多浮かせて風船売
ランドセル二つが草に水温む

あどけなき高さに一人静の穂
本間羊山

菜の花やどこまでつづく干拓田
水音がリズムとなりて踊子草
初夏や手垢愛めしる昆虫記
鍬の柄を上りつめたる子蟻螂

風光る鷗と着きし小豆島
落合絹代
フェリー着く港に句碑を読む遅日

◇特別作品◇

真田の郷

鈴木庸子

上田城攻め上ぐ千本桜かな
亀鳴くや鬼門の土塁隅落とし
真田井戸どこへ通じる春の闇
武者窓に覗く城下や花の雲
燕来る北国街道柳町
山独活の天ぷら手打ちそばすすり
砥石城へ剪定整ふりんご畑
石楠花のつぼみの中や信綱寺

魂宿る六文銭旗鳥雲に
長谷寺墓前へ枝垂桜かな
切り立てる猿飛岩へ蔦芽吹く
まはり来し真田の郷や春の暮
槽かましぼり地酒に春を惜しみけり
神川の源流湧き出づ春の水
あたたかや村入口に道祖神
花桃のことに色濃き生家かな
はらからの迎へてくれし春炬燵
浅間山真向ふ北窓開きけり
墓を訪ふ畦道芹の流れかな
ふるさとに別るる峠春夕焼

風土独語／南 うみを



藤の花山河は顔を輝かし

上辻 蒼人

晩春になるといつせいに山藤が咲き、山々が急に明るくなりま
す。まるで「ここにいるぞ」と言わんばかりに自己主張します。
また山も藤のおかげで、それぞれの表情を見せてくれます。作者
はそれを「山河は顔を輝かし」と表現しました。小さな山や名も
ない山もみんな顔があるのだと伝えていよす。

ぶつかりて離れて跳んであめんぼう

中嶋 陽子

この句は季語と対峙し、じっと見入ることによって得られます。
た。いわゆる「季語を写生する」という叙法です。「ぶつかる」「離
れる」「跳ぶ」「弾く」などの動きは「あめんぼう」の生感です。
そのような先行句もありますが、「ぶつかりて離れて跳んで」の
一連の動きをことばにするにはじっと見入る必要があります。見
入ることによって、対象（季語）が新たな一面をほんの少し見せ
てくれるのです。作者はそれを実践しました。

筍のステーキ厚きこと一寸

杉本薬王子

筍のステーキはよほど新鮮で柔らかくないとできません。全身
がまだ土の中にある筍を掘ったものでしょう。さて、素材は違い

ますが、この句の文体は芭蕉の「曙や白魚白きこと一寸」によく
似ています。パロディかと言えそうですがでもありません。同じ「一
寸」でも芭蕉のそれは小さい「一寸」です。この句の「一寸」は
三センチもある分厚い「一寸」です。私たちは芭蕉の句を重ねな
がら、この句を楽しむことができます。下五に「一寸」と置くこ
とで、筍ステーキの分厚さが強調されました。

モノレールこれより花の雲に入る

上村 葉子

「花の雲」はたくさん桜の木が連なつて、遠くから眺めると
雲が浮いているように見えることを言っています。さて作者はやや遠
い所から「花の雲」を見ています。そこへ「モノレール」がやっ
てきました。「これより花の雲に入る」とありますから、「花の雲」
の後ろを通過するのです。何よりも「花の雲」の高さと「モノレ
ール」の高さが同じでなければ、「花の雲に入る」の措辞は出て来
ません。「花の雲」と「モノレール」のよき出会いに遭遇しました。

思ひ出は殖ゆることなし花吹雪

雨宮 桂子

「殖ゆる」は単に数が増えるのではなく、金銭が大きくなると
か、繁殖の意味で生物の数が多くなる場合に使います。普通生き
ている限り数としては「思ひ出」は増えるはずですが作者はきつ
ぱりと増殖しないと断言しています。何故かといえば、この「思
ひ出」は人との関係の中で生まれる「思ひ出」だからです。この
関係が死や離別で断ち切られたら、関係が生む「思ひ出」はそこ
までとなりません。作者は「花吹雪」に佇み、断ち切られた関係を
反芻しているのです。「殖ゆることなし」は重いことばです

(以下略)

風土集



南うみを選

赤味差す染井吉野の散り極も 五條 上辻蒼人

川に降る雨も風情よ山桜

藤の花山河は顔を輝かし

風騒ぐ桜の蕊の降る日かな

曇天に花冷えの日々なほつづく

春惜しむちぎつて食べるフランスパン

モノレールこれより花の雲に入る

花の下園児の列の後につき

ランドセル近づく音や葱坊主

園庭に踏み台置かれ花御堂

顔洗ふ二羽の雀や春の川

行く春の楽屋のれんに空の色

子の跳んで我も跳んだり花馬酔木

青蔦や経済学部法学部

軒先の猫に近づくしやぼん玉

千葉 上村 蓼子

東京 中嶋 陽子

病む人に白が清しき躑躅かな 京都 杉本葉子

河口湖道の駅園二句

富士溶岩三葉つつじの一万本

富士ざくち小顔なるのも奥ゆかし

コッペパン憲法記念日の朝食

たんぼぼの遅しく咲く轍道

花は葉にキャンパスに会ふ芭蕉句碑

春愁のはめればまはる指輪かな

島の灯のまたたきて点く臙かな

俳画泛かぶ和紙のシェードや春灯

行く春の島に一会の放哉碑

轉りを手繰り寄せぬし望遠鏡

縄電車春泥に来て折り返す

春筍地下一尺に息しづめ

地震の土手割れて土筆の寸足らず

大和 落合 絹代

盛岡 石崎 浄